神戸 1.17→ 耐震検定

イッテンイチナナカラ

解説冊子

1.17 →
イッテンイチナナカラ

地震から
命を守るために

阪神・淡路大震災を経験していない世代である大学生が、震災について学び、感じたことを発信するプロジェクト「1.17→(イッテンイチナナカラ)」で「神戸耐震検定」を作成しました。耐震や防災に関する問題を解きながら、地震対策について考え、行動に移してほしいと思っています。

「1.17→」では、検定問題を作成するにあたり、さまざまな切り口から震災を知り、防災について考えるため、取材を行いました。取材先は、被災者の心に寄り添う取り組みを続けている方、震災の記憶や防災について市民に伝え続けている方、復興後のまちづくりや防災に関わっている方など、阪神・淡路大震災をきっかけにさまざまな活動をされてきたみなさんです。本冊子には、大学生が取材を通して感じたことを文章にした「学生コラム」を掲載しています。
震災を経験していない彼らだからこそ伝えられることがあるはずです。

大きな地震は、いつどこで起こるかわかりません。しかし、知識があれば、備えておけば、助かる命があるはずです。あなたと、あなたの大切な人を守るために、できることから地震対策を始めましょう。

KOBE
UNESCO City of Design

Q.01

震度7の地震が3日間で2回発生したのはどの地震でしょう。

Answer ④熊本地震（2016年）

解説

2016年の熊本地震では、4月14日から16日のわずか3日間で2度も震度7の地震が発生しました。気象庁によると、同一地域で震度7の地震が2回起きたのは観測史上初めてのことです。大きな地震が一度発生したからといって同一地域ではもう地震は発生しないとは限りません。過去に阪神・淡路大震災で最大震度7を記録した神戸市でも再び大きな地震が発生する可能性があります。

Q.02

南海トラフ巨大地震の今後30年以内における発生確率は何％と予測されているでしょう。

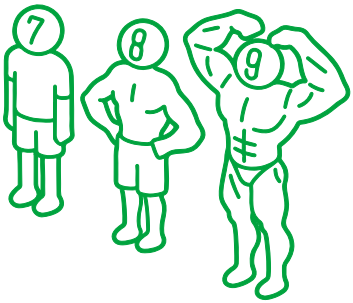
Answer ④70 ～ 80％

解説

マグニチュード８～９クラスである南海トラフ巨大地震の30年以内の発生確率は70 ～ 80％と言われています（2020年1月24日時点 文部科学省 地震調査研究推進本部より）。このように南海トラフにおける巨大地震発生の可能性が高まってきていますが、これ以外の地震も発生する可能性はあります。

地震はいつ起こるかわかりません。また、発生を防ぐこともできませんが、備えることはできます。被害を最小限にするため、くらしの防災ガイドなどを用いて、今から、できるところから対策しましょう。

Q.03



マグニチュード 9 の地震の
エネルギーの大きさは
マグニチュード7の何倍でしょう。

Answer ④1000倍

解説

マグニチュードは地震のエネルギーの大きさを表す指標です。阪神・淡路大震災のマグニチュードは約7でした。一方、南海トラフ巨大地震のマグニチュードは最大で9になると言われています。マグニチュードが1違うと地震のエネルギーの大きさは約31.6倍（$\sqrt{1000}$ 倍）になります。マグニチュード7とマグニチュード9の地震では数値が2違うため、南海トラフ巨大地震のエネルギーの大きさは、最大で阪神・淡路大震災の1000倍になると考えられます。地震に備えてしっかりと対策を行うことが大切です。

Q.04

阪神・淡路大震災において
亡くなった方※のうち建物の
倒壊や家具の転倒が原因と
なったのは何割でしょう。

※地震による直接的な犠牲者5,502人

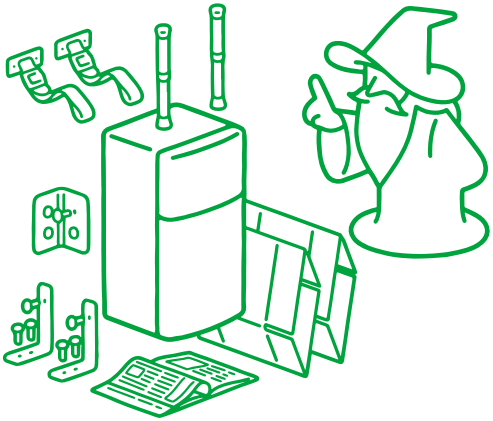
Answer ④ 約 9 割

解説

阪神・淡路大震災では、地震により6,434人の尊い命が奪われました。このうち地震による直接的な犠牲者は5,502人であり、さらにこの約9割の4,831人が建物の倒壊や家具の転倒等によるものであったとされています。建物の耐震補強を行い、家具を固定することで、今後大きな地震が発生した際に、命が助かる可能性が高くなると言えます。

Q.05

家具の地震対策で
最も有効なのは
どれでしょう。



Answer

①金具や地震対策ベルトで固定する

解説

家具を金具や地震対策ベルトで壁に固定することは地震対策としてとても有効です。地震の発生時には、家具の転倒によって怪我をしたり、ドアがふさがれ部屋に閉じ込められたりする危険性があります。

家具を金物等で固定するほかにも、家の中のものを整理し家具の数を減らすことも有効です。ぜひご家庭の地震対策を見直しましょう。

Q.06

建築基準法の耐震基準が強化され、
現行の基準と同等になったのはいつでしょう。

Answer ②1981年

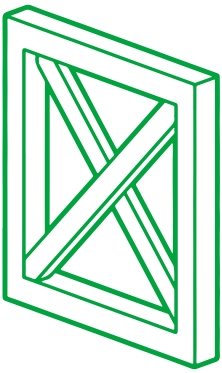
解説

宮城県沖地震（1978年）を受けて、建築基準法が1981年6月1日に改正施行され、建物をより地震に強くするため、耐震基準が改められました。改正前の耐震基準は「旧耐震基準」、改正後の耐震基準は「新耐震基準」と呼ばれています。「新耐震基準」は、建築基準法上の最低限順守すべき基準として、中規模の地震（震度5強程度）に対してはほとんど損傷を生じず、大規模の地震（震度6強から7程度）に対しても人命に危害を及ぼすような倒壊等の被害を生じないことを目標にしています。

1981年5月31日以前に建てられた建物（築40年以上の建物）は、耐震性が不足している場合があります。阪神・淡路大震災でも、1981年以前に建てられた建物に被害が集中しました。築40年以上の家にお住まいの方は、ぜひ耐震診断を受けてみてください。

Q.07

建物の耐震性を向上するために壁を補強する場合、最も耐震性が高くなるのはどれでしょう。



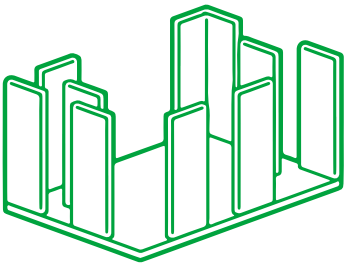
Answer ①

解説

①のように柱と柱の間に取り付ける斜め方向の補強材を「筋交(すじか)い」（ブレース）と言います。柱と梁(はり)によって形づくられる長方形は、地震などの水平にかかる力を受けたときに平行四辺形に変形してしまいます。そこで、対角線状に筋交いを加えることで、変形を防ぎ、地震に対して強くすることができます。筋交いの端部は、地震などの力が加わったときに外れてしまわないよう、ボルトや金物などで柱や梁等に固定します。

多くの木造住宅の耐震改修工事では、このように壁に筋交いを入れて耐震性を高めています。木造住宅の場合は、壁の中に隠れてしまって見えませんが、大きな駐車場や学校の校舎などで、この斜め方向の補強材（ブレース）を見ることができるかもしれません。

Q.08



この中で最も地震に強い壁の配置はどれでしょう。

Answer ①

解説

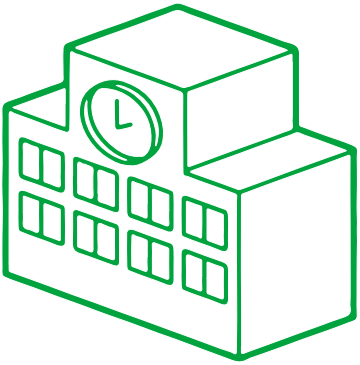
壁の量だけでなく、配置やバランスも耐震性に関係します。例えば「建物の南面に全く壁がない」など、壁の配置が偏っていると、バランスが悪く、耐震性も低くなります。

築40年以上で、窓が大きく、壁が少ない家にお住まいの方は、一度耐震診断を受けてみてください。

Q.09

神戸市の公立学校園（小・中学校や高等学校など）の耐震化率※は何％でしょう。

※耐震性のある建物の割合



Answer ④100%

解説

神戸市の公立学校園（小・中学校、高等学校、幼稚園、特別支援学校、義務教育学校）については、全て耐震化が完了し、現行の基準に合った耐震性が確保されています。学校の校舎・体育館は、災害時には地域の防災拠点としての役割も求められることが多いため、神戸市は、目標を立てて耐震化に取り組んできました。現在、どの公立学校園に行っても、耐震性は確保されているので安心してください。

Q.10

次のうち、最も重いものはどれでしょう。

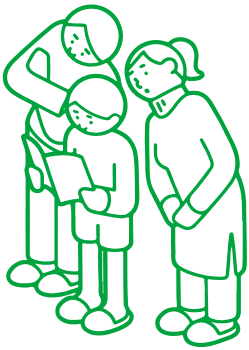
Answer ④コンクリートブロック

解説

コンクリートブロックは、小さいものでも1ブロック当たりの重さは約10㎏です。
2018年に起きた大阪府北部地震では、ブロック塀の倒壊による人的被害が発生しました。また、阪神・淡路大震災でも、兵庫県内でブロック塀の倒壊が約1500件発生しており、ブロック塀などの転倒物や建物外装材などの落下物も多かったことが報告されています。※
屋外にいる際に地震が発生した場合は、ブロック塀や自動販売機などから速やかに離れましょう。また、ビルの壁、看板や割れた窓ガラスなどの落下物に注意して安全な場所に避難しましょう。
なお、広辞苑（第七版普通版）は約3.3kg、ボウリングの球は16ポンドのもので約7.2kg、チェロは約3.5kgです。

※阪神・淡路大震災について（確定報）（2006年5月19日消防庁）

Q.11



神戸市が発行する、災害への備えの知識がまとめられた冊子の名前は何でしょう。

Answer ②くらしの防災ガイド

解説

「くらしの防災ガイド」には、災害に関する正しい知識や適切な避難行動、日ごろの備えなどに関する情報が掲載されています。また、災害の危険箇所を示したハザードマップや災害時の避難行動を事前に確認するための「わが家の避難ルール（マイタイムライン）」なども掲載されています。災害が発生した時にすぐに適切な避難行動をとるのはとても難しいものです。くらしの防災ガイドを参考に、ふだんから家族や友人と話し合っておきましょう。また、くらしの防災ガイドはすぐ手に届くところに保管するなど、いつでも確認できるようにしておきましょう。
くらしの防災ガイドは、毎年6月頃に全戸配布しているほか、
神戸市のHPにも掲載されています。右の二次元コードからアクセスしてください。

Q.12

災害に備えた家庭内の備蓄は、少なくとも何日分用意しておくべきでしょう。

Answer ②3日分

解説

南海トラフ巨大地震などにより大規模な災害が発生した場合、建物の倒壊などで道路がふさがれることもあり、救援物資がすぐに届くとは限りません。少なくとも3日分、できれば7日分の食べ物や生活に必要なもの（着替え、充電器、薬など）を備蓄するようにしましょう。例えば1日あたり、水は3リットル（飲料水＋調理用水）、食料品は3食分が最低限の目安です。備蓄している食糧を普段の食事で使いながら、消費した分を買い足すローリングストック法も活用してみましょう。長期保存しなくてよいので、賞味期限の短いものでも備蓄できます。

Q.13

地震の揺れを感知し、自動的に電気を止めることで火災を予防するブレーカーの名前はどれでしょう。

Answer ②感震ブレーカー

解説

阪神・淡路大震災では、出火原因が明らかなもののうち、約6割が電気火災でした※。地震が引き起こす電気火災とは、地震の揺れに伴う電気機器からの出火や、停電が復旧した時に発生する火災のことです。感震ブレーカーは、地震を感知すると自動的にブレーカーを落として電気を止めます。感震ブレーカーを設置して電気火災から家と地域を守りましょう。

※地震時における出火防止対策のあり方に関する調査検討報告書（1998年7月消防庁）

Q.14

災害時の避難所で、小さな子どもがいる方や妊婦の方など、何らかの特別な配慮を要する方のために、市が二次的に開設する避難所のことを何というでしょう。

Answer ②福祉避難所

解説

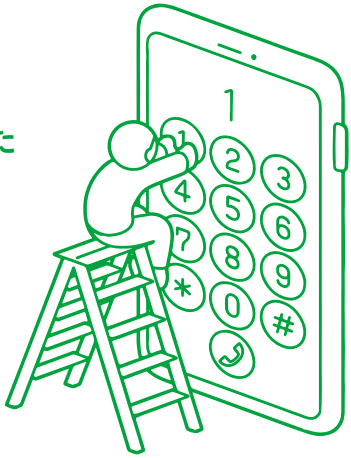
小さな子どもがいる方や妊婦の方、障がいのある方など、災害時の避難所での生活において、何らかの特別な配慮を要する方々のために、市が二次的に開設する避難所のことを「福祉避難所」と言います。老人ホーム等の社会福祉施設のほか、市と協定を結んでいるホテルや旅館も福祉避難所になります。

災害時には、まずは近くの小学校などの避難所へ避難してください。避難所を巡回する保健師等が本人やご家族の意向や状況を確認したうえで、市が福祉避難所受入れの対象者を決定します。

なお、新型コロナウイルスに感染し自宅療養中の罹患者や濃厚接触者の方は、お住まいの区の保健センターにお電話のうえご確認ください。

Q.15

災害時に電話がつながりにくくなった場合の伝言サービス「災害用伝言ダイヤル」の電話番号は何番でしょう。



Answer ④171

解説

「災害用伝言ダイヤル」の電話番号は、171です。「災害用伝言ダイヤル」は、電話を用いて伝言の登録・確認ができるシステムです。災害用伝言サービスは、他にも災害用伝言板、災害用音声お届けサービスなどがあります。これらのサービスは、毎月1日、15日などに体験利用ができます。家族や友人と体験利用日に使い方を確認するとともに、災害時の安否確認方法をあらかじめ決めておくなど、いざというときに備えましょう。

Q.16

被災した神戸市の復興を願うシンボル曲として歌われ、神戸市歌にも制定された曲はどれでしょう。

Answer ③「しあわせ運べるように」

解説

「しあわせ運べるように」は、阪神・淡路大震災発生から約2週間後に、当時中央区の吾妻小学校に勤めていた臼井真さんによって作詞作曲された曲です。震災で犠牲になった方々への鎮魂と神戸の再生を願って作られたこの曲は、今でも歌い継がれており、2021年1月17日に神戸市歌に制定されました。

この曲は神戸のみならず、全国、世界へと広がっています。2008年に中国で発生した四川大地震の際には中国語で歌った映像が神戸から中国へ届けられました。また、東日本大震災が発生した際にも、歌詞の「神戸」という部分を「ふるさと」に変え、同じ被災地として歌でエールを届けました。

「花は咲く」は東日本大震災復興支援ソングです。また、「ジュピター」は新潟県中越地震の際に、被災地からラジオにリクエストが多く寄せられた曲です。

学生コラム

01

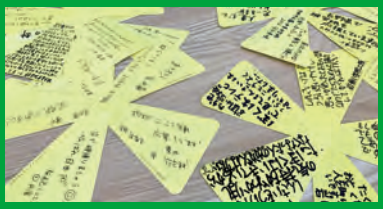
NPO法人Co.to.hana代表 西川亮さんを取材して

八木 愛優（20歳）

NPO法人Co.to.hana代表の西川亮さんが始めた、「シンサイミライノハナPROJECT」は、人と人とを繋ぐ絆を、世代を超えて共有し可視化する取り組みです。花びらに見立てた黄色いメッセージカードに、一人ひとりの震災に対する想いが書き込まれ、5枚の花びらが一つの花となって完成します。そうして各地の被災地に届けられた「シンサイミライノハナ」はまちの中に飾られ、人々の心に優しく寄り添い、そのあたたかさを教えてくれます。

今回、インタビューを行ったなかで、「震災を学ぶことは、神戸を知ることでもある」という西川さんの言葉がとても印象に残っています。まちの至る所に震災に関する記憶が残されていること、震災を経験したなかで作られた防災のための歌があること、今でも当時のことを鮮明に思い出せるほど心に傷を抱えたままの人がいることを知りました。そして、それは今まで私が目を向けることがなかった、他のまちにはない神戸の一面だと気づきました。私は、震災を経験した人とそうでない人、自ら学んだ人と学んでいない人とでは、神戸の見え方も少しずつ違うのかなと思います。

例えば、私はご高齢の方に阪神・淡路大震災での経験について触れることは気まずいことだと思っていました。しかし、実際は同じ思いをしてもらいたくない、忘れてほしくないと思っている方がたくさんいるということを知ることができました。そして、経験したからこそ感じた神戸の見え方の違いを若い人にも共有してほしいし、もっと知りたいとも思いました。震災について学ぶためにいきなり行動することはなかなか難しいと思います。ただ、自分が好きな趣味について友人に語るときのように、自分が暮らしているまちのことを語るというのは、当たり前にできなければいけないことだと思います。そして、神戸で起きた出来事を知り、自分を大切にしてくれる人にもそれを伝えるということは、その人への恩返しでもあると思います。自分の大切な人に、今どんな歴史のある場所で暮らしていて、どんな想いを抱えた人がいる場所で過ごしているのかについて話し、聞いてもらうことを通じて、まずは神戸のまちや人々の良いところを知ってもらう。そして、大切な人の命を守るために、一緒に防災について考えるきっかけにしていきたいと思います。



学生コラム

02

「その街のこども」プロデューサー 京田光広さんを取材して

吉田 有里（20歳）

NHKプロデューサーの京田光広さんは、阪神・淡路大震災から15年の年にドラマ「その街のこども」、25年を迎えた2020年にはドラマ「心の傷を癒すということ」をプロデュースされました。また、「防災・減災」「災害ボランティア」をテーマの特集番組の取材や企画も手がけておられます。

私が「1.17→」に参加するきっかけとなったのは、中学時代に震災を経験した主人公のドラマを見たことでした。フィクションですが、そのドラマでは震災を経験した「人」の内面が丁寧に描かれ、とても印象に残りました。なぜかというと、私が小学生から大学生になるまで学んできた神戸の震災に関する内容といえば、当時と現在の写真を横に並べた、物質的な復興の側面が強く印象にあったからです。また、街がどんなに復興をしても、目に見えない震災の傷は「人」の中にまだまだあるのだとも感じました。それは目に見えないだけで、もしかしたらすぐ隣の人も、今すれ違った人も。身近な人を亡くした遺族の方だけでなく、誰もが。震災の経験に限らず誰しもが心の中に『小さな渦』を抱えて生きているのかもしれないと思うようになりました。「人」に注目することが大事であることもまた、私が人の心や想いを知ろうとする行動がなければ、気づけなかったことでした。「その街のこども」も、「人」に焦点を置いた作品でした。見ようと意識しなければ見逃してしまうであろうたくさんの「その街」に住んでいた人々のなかで、『ひとり』の心の中に焦点が当てられている視点が興味深く、京田さんにお話を伺うのがとても楽しみでした。

京田さんが述べられた言葉が私の心にたくさん残っています。「自分は経験していなくて、遠くにいます。改めて向き合うという意味では、本質的には今の若い世代と同じ立場だと思っています。」「知らないから知ろうとする上で大事なことは『寄り添う』ことだと思います。」

そして私は、この取材をきっかけに、これまであまり触れられなかった「震災と人の心」について考えました。私たちがこうして考えること、向き合うことそのものが寄り添うことにつながるのかもしれません。テレビ局のプロデューサーとして伝える立場の京田さんと、震災を知らない世代として伝える文章を書く私たち。京田さんから「1.17→」の取り組みを行うための大切な視点を教わり、私自身、見えないものを少しずつ見ようとすることができるようになったと思います。

学生コラム

03

株式会社 フェリシモを取材して

神戸市中央区新港町にある「しあわせをデザインする会社」フェリシモは、防災グッズの商品開発にも取り組んでいる会社です。おいしい非常食や、普段はかわいく使える宇宙服のようなデザインのエマージェンシーキットなど、便利で役立つことはもちろん、食品・雑貨としても欲しくなる工夫とアイデアの詰まったグッズで防災を身近なものにしています。

今回、私がフェリシモを取材先に選んだ理由は「被災地神戸の企業で、防災にも積極的に取り組みながら働く人の話を聞きたかったから」です。個人的に商品企画に興味があったこともあり、自社で防災グッズの企画から販売まで行っていたフェリシモは、特に魅力的に思いました。取材では防災チームの方々が、防災に関わる仕事をはじめたきっかけや、防災に対する思いから学生時代に熱中していたこと、若者に伝えたいことなどについて幅広く話を聞くことができました。その中でも特に気になったことは「『被災者』と括って考えてしまうと、そこから『被災者』と『被災していない人(自分たち)』という気持ちの分断が生まれてしまう」という話です。その話には私が高校生の頃、被災地でボランティア活動した際に感じた「良い違和感」と重なるものがありました。「良い違和感」とは、「現地の被災者の人たちは私たちと何ら変わりのない普通の人間。被災は特別な経験ではなく私たちの日常の延長線上にある、いつでも起こりうるもの」ということです。いつ何が起こるか予測できる人もいるかもしれませんが、私にはできません。いざというときに自分の命を守れるように、常に防災を意識する必要があると思いました。防災は、ビクビク怯えながら取り組むものではないと思うので、何気ない日常の中で無理せず気負わずに防災のことを考えていきたいです。(何が正解とは決めきれないなとも思いながら。)また、防災以外にも仕事や考え方について様々な話を伺いました。取材のなかで「世間一般的には失敗として捉えることも逆転の発想として利用する」姿勢や「終わりよければすべてよしと考える」発想などを聞き、「何事も失敗を恐れず果敢にチャレンジすること」が一番大事だと強く思いました。本や雑誌で同じような言葉に出会ったことはあっても、ここまで自分自身の気持ちが変化したことはありませんでした。「しあわせをデザインする会社」で働く人ならではの前向きなスタイルに違いないと思いつつ、私自身もフェリシモで学んだ考えを大事にしていこうと思います。最後に今後の抱負を宣言します。少しずつですが私の中での防災に対するイメージがまとまりつつあるので、それらを具体化し自分自身と周囲の人の命を守れるようにします。私が防災クイズやグッズの話をしたときはゆるくで良いので聞いてもらえたら、とても嬉しいです。無理せず肩の力抜いて、楽しく面白く防災を心掛けていきましょう。

芝 光彩(21歳)

学生コラム

04

株式会社 神戸新聞社を取材して

占部 史夏（20歳）

神戸新聞は、阪神・淡路大震災で甚大な被害を受けたにもかかわらず、震災後1日も休むことなく新聞を発行し続けた地域メディアです。避難所に正確な情報を伝え、不安に陥る市民たちに強い安心感を与えました。当時、記者として記事を書き続けた、三好正文さんと徳永恭子さんに、当時の記憶と継承していくためにメディアができることを伺いました。

私が神戸新聞に取材しようと思ったきっかけは、小学生のときに見た『神戸新聞の7日間』というドラマでした。原作は『神戸新聞の100日間』という神戸新聞社発行の本で、阪神・淡路大震災下で新聞製作にもがき苦しむ同社の記者たちを描いたドキュメンタリードラマです。あるシーンで、瓦礫に埋もれた人を助ける現場に神戸新聞のカメラマンが居合わせ、カメラを向けると、救出作業に当たっていた市民が「写真なんか撮っとらんと早よ助けえや！」と叫ぶ場面がありました。ドラマの放送から10年以上が経ちますが、私はそのシーンが今でも忘れられません。私はずっと崩壊したまちや避難所を取材する苦悩を知りたいと思っていました。

取材を通して、私がドラマで見たのは震災報道のほんの一部に過ぎなかったのだと気づかされました。焼け野原と化したまちや不便な避難所にだけでなく、復興計画というポジティブなはずの出来事にさえ、震災の苦しみが潜んでいたのです。地震が遺した傷は想像以上に大きく、なんとなく分かった気になっていた自分を恥じ、震災を知らない世代が後世に語り継ぐプロジェクトに参加していながら、伝承できるのか自信をなくしそうになりました。

しかし、徳永さんの言葉にハッとしました。「占部さんの質問内容が、若手の記者が聞いてくることと重なる」。その言葉を聞いて、神戸新聞社でも、震災を経験していない若い記者の皆さんが震災を語り継ごうと奮闘しているのだと知りました。そして私も、震災を後世に遺す一員になろうという思いが改めて芽生えてきました。

私たちが阪神・淡路大震災を誰かに伝えようとするとき、体験していないからこその不安や責任の重さを痛感することがあります。けれど、たとえ知識や経験が不十分であったとしても、阪神・淡路大震災を未来に遺そうという気持ちを持っていることこそが大事なのではないでしょうか。震災の記憶は、伝え続けなければ、いつか忘れ去られてしまいます。私には、神戸に暮らし、ここで生まれ育った若者として積極的に継承していく責任があると思っています。

学生コラム

05

はっぴーの家ろっけん 首藤義敬さんを取材して

株式会社Happyの首藤義敬さんは、長田区に生まれ、小学校3年生の時に阪神・淡路大震災を経験したことを経て、2017年に「はっぴーの家ろっけん」を立ち上げました。介護付きシェアハウスと称されるその場所は、いわゆる介護施設や、老人ホームとは、一線を画す場所です。小さな子ども、地域の学生、社会人、お年寄り、外国人など。多世代で、多文化な背景を持つ人びとが、日常的にそこへ集まっていて、みんなが顔見知り。希薄になりつつある人と人とのつながりが存在しています。

「はっぴーの家」を初めて訪れたとき、子どもたちのはしゃぐ声が響き、お年寄りは椅子に座ってくつろぎ、若者はPCで仕事をしていました。そこには、既存の言葉で表すことは難しい「人が生きている」居場所がありました。スタッフの方々に、あなたにとって「はっぴーの家」は何かと問うと、複数人の口から、「家」という言葉が。その答えを聞いて、日常的に何度も顔を合わせ、首藤さんの言う「顔の見える関係」が、実際に生まれているということがすぐに伝わりました。震災を経験していない人にとっての居場所でもあるこの「家」で、被災された首藤さんの思いが自然と伝わっていることに気が付きました。今回のインタビューを通して、震災から27年という年月が経った今でも、長い時間をかけて自分の気持ちを整理し、再解釈を続けている首藤さんの姿がとても印象的でした。震災の記憶は被災者の方の心の中に現在進行形で生き続けていることを改めて実感。首藤さんの思いや考えは、「はっぴーの家」にいる人たちの身にしみついた知恵となって、これからも次の世代へと伝えられていくことでしょう。

こうしている今も、時間はどんどん未来へと流れています。地震大国の日本に生きる私たちの使命は、震災の記録、被災者の方の記憶を、色褪せないように伝えること。そのために、震災を経験していない若い世代にできることは、今も生き続けている被災者の方の心の中にあるストーリーを知り、自分の言葉にして、次の世代に語り継いでいくことであると強く思いました。

「はっぴーの家」で「再現性のない時間」が生まれる瞬間が一番幸せだという首藤さん。自分のかけがえのないものを災害で失わないために、今の自分にできることは何か。大切な人と一緒に考え、防災に一歩踏み出すきっかけにしていただければ幸いです。

永山 菜花（19歳）

学生コラム

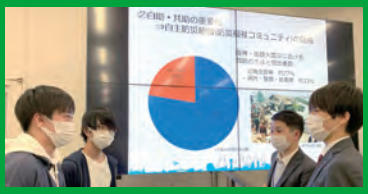
06

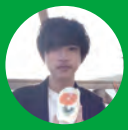
神戸市危機管理室を取材して

神戸市危機管理室とは、神戸を安全で安心なまちにするために災害対応や国民保護、地域防災計画の策定、防犯、交通安全などの業務を担う部門です。取材に応じてくれたのは、神戸市危機管理室の大野敬介さんと福井涼平さん。実はお二人とも阪神・淡路大震災当時はまだ幼く記憶はほぼないと言います。現在は災害対応や防災啓発、地域防災計画の策定などに携わる職員として、震災を知らない大野さんと福井さんが、日々どんな思いでまちを支えるための活動を手がけているのか話を伺いました。

インタビューを終えて最も強く感じたことは、お二人の「真剣さ」でした。阪神・淡路大震災をきっかけに神戸市の防災体制がどのように変化していったのか、そして、お仕事に対する心構えや、市民に知ってほしいこと、危機管理室の事業や体制、防災計画など、さまざまなことをお聞きしました。お二人ともとても防災について詳しく、市民の方の命を守るために真剣にお仕事に取り組まれていると感じました。

震災から25年以上が経ち、震災を知らない世代が神戸市で働き、まちを支え始めています。防災事業についても例外ではなく、大野さんや福井さんを含む震災を知らない世代が神戸市の危機管理を担っています。私は、今後も震災を知らない世代の人の割合が増え、震災に対する大人の意識が低くなってしまうのではないかと考えていました。しかし、お話をお聞きするうちに、その考えを改めることとなりました。インタビューでは、真剣かつ懇切丁寧に危機管理室での事業や、有事の際に市民の方を守る体制について教えていただけましたし、お二人が震災を知らない世代であること忘れてしまいそうになるほど、今後起こりうる災害に対する危機感を持っておられました。こうした、強い意識を持つ背景には、震災を風化させずにその意思を引き継いでいこうという神戸市の強い姿勢が垣間見えました。また、このことから震災を知らない世代でも啓発や震災の経験を引き継いでいくことで、震災を経験した世代と同様の意識を持つことができるかもしれないと感じました。市民一人ひとりが防災意識を強く持つことができれば、震災が発生した際の連携も全く異なったものになるのだろうと感じました。そのために、どれだけ時が経ったとしても震災に関する経験や知識を発信し、防災の啓発活動を行っていくことが神戸を震災に強い場所にするために大切であると気づきました。





横田 虎太郎（23歳）

学生コラム

07 有限会社 スタヂオ・カタリスト代表 松原永季さんを取材して

「スタヂオ・カタリスト」の代表で一級建築士の松原永季さんは、神戸の建築事務所に就職した3年後に阪神・淡路大震災に被災しました。その後、まちづくりコンサルタントとして神戸の復興まちづくりに携わるようになったことをきっかけに、まちの個性を活かしつつ防災対策もできるまちづくりを目指してこられました。現在は駒ヶ林を拠点に活動する松原さんに、震災での経験がもたらしたもの、そして、人々の『記憶のよすが』になるまちづくりについてお聞きしました。

私は20年間暮らし続けている神戸というまちが大好きです。神戸の魅力は、洗練された異国情緒あふれる都市部から少し離れると豊かな海や山があり、そして駒ヶ林のような下町文化が今もなお残っているという様々な面を併せ持つ点にあると思います。私自身、小中高とそれぞれ下町で過ごしてきたので、「通学路にあった駄菓子屋のおばちゃん元気かなぁ」などと、今でも思い出すときがあります。そして、懐かしい思い出のなかには必ずまちの雰囲気や情景を形作る『建物』があります。高校卒業後、久しぶりに当時と変わらない通学路を歩くと、その当時の思い出や感情が沸々と頭の中に浮かび上がり、どこかホッとした気持ちになりました。

「建築は記憶の器である。建築物は、毎日いろんな人の目に入り、物理的な大きさも相まって人々の記憶に残る物である。そして、自分の自己同一性、つまりアイデンティティというのは自分の経験や記憶によって担保されるものであるから、建築物は『記憶のよすが』になることができる。」この言葉は、松原さんが建築の師匠から受け継ぎ、今も大切にされている考え方です。松原さんは、『記憶の器』として人々の心の拠り所となるようなまちを目指して、日々活動されています。震災による心の傷には、自分にとって大切な家族や友人を失うという計り知れない悲しみに加えて、無意識のうちに自分が心のよりどころとしていた思い出の詰まった『まち』の姿を失うという悲しみもあると思います。私は「1.17→」の活動を通じて、「知識があれば防げる被害」というものをなくしていきたいと考えています。それがたとえ小さなことだったとしても、一人ひとりが日頃から防災意識を持つことで、まち全体の防災力は向上することでしょう。あなたの心のふるさとはどんなまちですか？あなたにとって、かけがえのないふるさとのまちがいつまでも元気な姿であるために、今日から防災対策を始めてみてほしいです。

鎌田 春風（20歳）

学生コラム

08

「しあわせ運べるように」の作者 臼井真先生を取材して

大原 武人（22歳）

臼井真先生は、震災が起こる前から、「しあわせを運ぶ天使の歌声合唱団」という子どもが地域の人や学校の先生に歌のプレゼントをする企画をしていました。阪神・淡路大震災では、自宅が全壊。代表曲「しあわせ運べるように」は震災の復興を願う歌として神戸市すべての小学生をはじめ、世界各地で歌い継がれ、２０２１年1月17日に神戸市歌に指定されました。これまで小学生のためにオリジナル曲を４００曲以上作詞作曲されています。

私は小学生の時に「しあわせ運べるように」に出会いました。この歌を、震災の日が近づくと、音楽の授業で歌っていましたが、歌の歌詞を意識して歌ってはいませんでした。音楽の先生から、どういう風に教えられたのかは覚えていませんが、上手に真面目に歌うことだけを心掛けていた記憶があります。そして今回、この歌ができるまでの背景や、込められた思いをお聞きし、小学校の時に心を込めて歌えていない自分に何かもどかしさのようなものを感じました。これから先、機会があるのなら、歌詞に込められた意味、６４３４人の亡くなられた方のことを思い、歌いたいと思います。こういった後悔を今の小学生、震災を経験していない世代にしてほしくないです。特に、初めてこの歌に出会う小学生に、震災のことや、この歌の歌詞一つ一つの意味を学ばせない、考えさせない、雑に歌う、そんな世の中にはなってほしくないと心から思いました。子どもが考え学ぶことのできる権利を大人が奪ってはいけません。それは、教師でなくても、私たち、震災を経験していない世代にも言えることだと思います。

これからの時代、震災を経験していない世代が震災を経験していない世代へ、震災のことを伝える機会が増えてきます。その時に、少なくとも私は、臼井真先生がこの歌に込めた思いを、６４３４人の亡くなられた方の悲惨な記憶を、周りの友達、家族に伝えていきたいです。そうすることで、震災の記憶の風化を防ぐ手助けができたらいいと思います。そして、この記事を読むことで、一人でも多くの人が自分の命のこと、阪神・淡路大震災を考え直すきっかけになってくれればと思います。

1.17→（イッテンイチナナカラ）

主催	神戸市
共催	（一財）神戸すまいまちづくり公社
協力	（一社）兵庫県建築士事務所協会神戸支部 （公社）兵庫県建築士会住教育支援チーム
デザイン	すみかずき（KEYDESIGN）
編集サポート	山森 彩・東 善仁（合同会社ユプネ）
参加学生	占部 史夏・大原 武人・鎌田 春風・芝 光彩・永山 菜花・八木 愛優 横田 虎太郎・吉田 有里

令和4年1月発行
神戸市広報印刷物登録　令和3年度　第543号（広報印刷物規格　A-1類）

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。